



Title	入居者の行動と外部空間のあり方：グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について（その4）
Author(s)	戸所，真聡；隼田，尚彦；浅野，倫子 他
Citation	学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2002, 293-294
Issue Date	2002-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38281
Rights	日本建築学会
Type	journal article
File Information	mori-28.pdf



入居者の行動と外部空間のあり方

ーグループホームにおける環境と人間行動の相互作用について(その4)ー

痴呆性高齢者、グループホーム、外部空間、複数ユニット、環境行動

正会員○戸所真聡*1

同 隼田尚彦*2

同 浅野倫子*3

同 奥 俊信*4

同 森 傑 *5

1. 背景と目的

痴呆性高齢者向けの施設では安全管理上、外部空間に通じる出入り口を施錠することが多かったが、安全な外部空間を用意し、入居者が積極的に利用できることも痴呆のケアとして重要であるという見解が述べられている^{文1)}。

本稿では前稿に引き続き、同一グループホーム(以下: GH)における外部空間に着目し、GHの外部空間のあり方を探ることを目的とする。

2. 調査概要

調査対象 GH の外部空間(図1)の特徴を以下に示す。

- ・安全な中庭に玄関があることで、玄関を開放し入居者の自由な活動が外部空間へと広がるように計画されている。
- ・明るく開放的なカバードウォーク(路地)で棟間をつなぎ、冬でも外出が可能である。
- ・3棟の中心にベンチの置かれた「東屋」があり、会話や休憩などくつろぐことができる。また棟をこえた交流が期待される。

本稿では前稿の行動観察調査に加え、ビデオ観察調査とスタッフに対する外部空間の評価・要望のヒアリング調査を行った。ビデオ観察調査はビデオカメラを3箇所(図1参照)に設置し 2001/8/25~8/31、9/2~9/8、9/9~9/15 の3週間の計21回、8:00~18:00に行った。

3. ビデオ観察調査の分析

3-1 外部空間の利用状況

図2にH2、H6、B2、Y2氏の外部空間の利用回数および滞在時間を示す。H2、B2、Y2氏は外部空間を頻繁に利用す

る典型例である。H2氏は広い範囲にわたって各空間をこまめに利用している(図3)。一方H6氏は利用回数が少なく、限られた範囲でしか外部空間を利用していない(図4)。

滞在時間では4氏とも「敷地外」や「車で外出」といったGHの敷地外の割合が高い(図5、6)。痴呆性高齢者は社会とのつながりが少なくなりがちであるが、当該GHは近所への散歩や買い物などのプログラムを通じて積極的に地域社会とのつながりを持っていることがうかがえる。

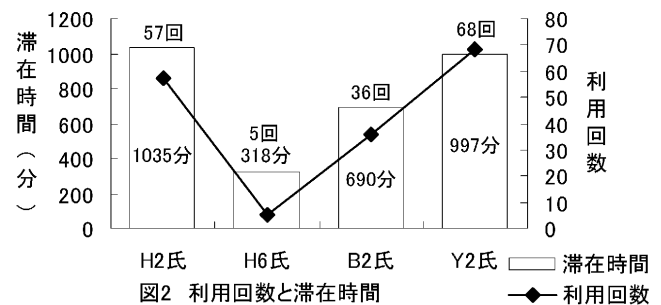


図2 利用回数と滞在時間

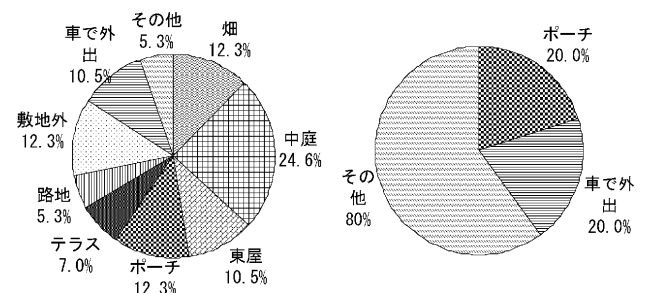


図3 場所別利用回数割合 (H2氏)

図4 場所別利用回数割合 (H6氏)

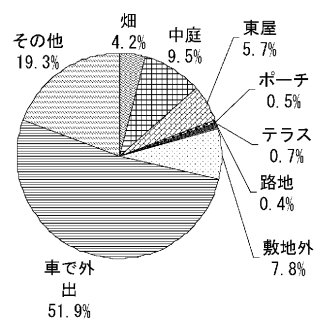
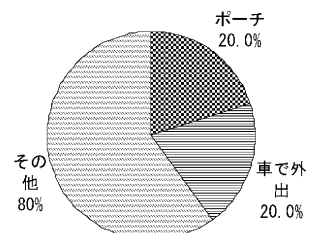


図5 場所別滞在時間割合 (H2氏)

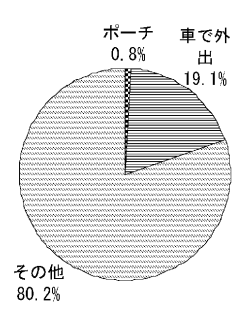


図6 場所別滞在時間割合 (H6氏)

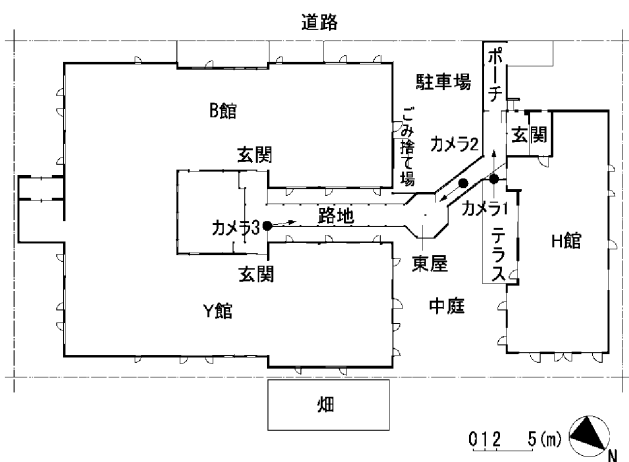


図1 調査対象GH

Residents' behavior and the utilization of outdoor environment

-Environment-Behavior interaction at a Group home for People with Dementia (Part4)-

TODOKORO Masato, HAYATA Naohiko, ASANO Michiko, OKU Toshinobu, MORI Suguru

3-2 各棟の外部空間の利用状況

図7に棟ごとの各空間の利用回数を示す。B館、Y館は「東屋」の利用が多い。近所への散歩やごみ捨ての帰りに休憩する行為が多くみられ、移動空間である「路地」に、滞在空間である「東屋」が挿入されていることが一要因と考えられる。一方、H館では移動の途中に利用することは少なく軽作業後の休憩や、おやつの集まり等に利用している。またH館、Y館は「畑・中庭」の利用が多い。H館では居間から「中庭」が見え、Y館では居間や居室から「畑」が見えること、畑仕事に慣れている入居者が多いことなどが要因と考えられる。一方でB館は畑仕事に不慣れな入居者がほとんどであることも利用の低さに影響していると考えられる。

3-3 自発的行動

調査対象 GH は安全な外部空間を持ち、自由な出入りが可能である。そこで、入居者の外部空間における自発的行動について考察する。図8に棟ごとの自発的行動回数と総行動回数に対する比率を示す。B館はY館に比べ自発的行動が2倍以上多く見られ、入居当初から外部空間に自由に出入りできたことが現在の自発的行動の多さにつながっているといえる。Y館は平成12年の12月まで玄関が施錠されていたため、入居当初から全く外部空間を利用することができず、その影響が入居者の行動に顕著に表れていた(浅野ほか2000)。現在、Y館では積極的なプログラム外出によって入居者に外出できることを教育中である。本調査に自発的外出が少し見られ始めており、今後徐々に増加すると予想される。

自発的行動が多く見られた場所は「東屋」、「路地」、「ポーチ」で特に「東屋」では入居者が自発的にベンチで休憩する行為が多く見られ、入居者にとって居心地がよく、利用しやすい場所であるといえる。

4. 行動観察の結果と分析・考察

入居直後から定期的に行なっている行動観察の結果を含め、外部空間利用の経時的変化に関する考察をおこなった。以下にB2氏の事例について述べる。

入居後3週間ほど経つとスタッフと「路地」の散歩を始め、外出が多くなるにつれて自発的外出が外出行為の多くを占めるようになった(図9)。「東屋」の利用や、「敷地外」に散歩に行くなど、行動範囲が広がったが、入居者だけで敷地外に出ることを禁じられたため「ポーチ」の利用が増加した。仲の良いB1氏が積極的に外出するため、B2氏は一緒に外出することが多かった。B1氏の退居後、B2氏の外出は減少し、プログラムによる外出の割合が高くなったが、最近の調査では1人での自発的外出も見られている(図9)。B1氏退去後の外出の減少が著しいことから、外出の要因と

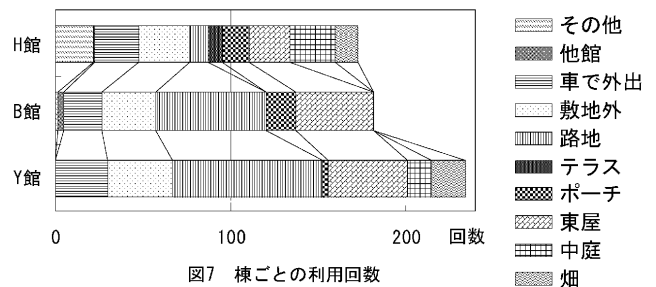


図7 棟ごとの利用回数

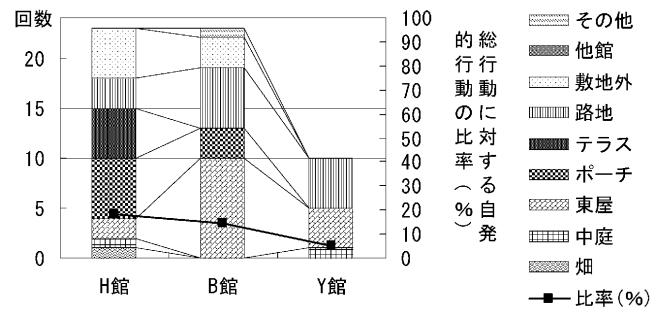


図8 棟ごとの自発的行動回数

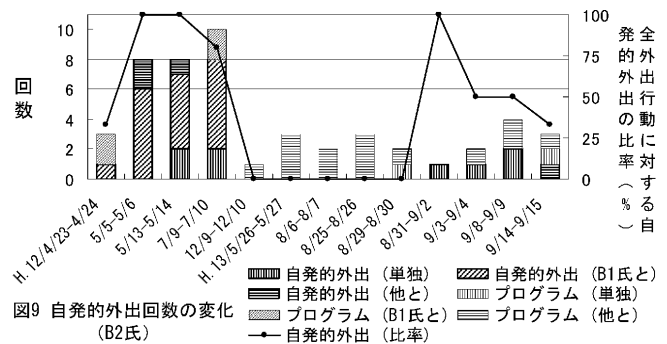


図9 自発的外出回数の変化 (B2氏)

して人的な要因も大きいと考えられる。

5. まとめ

ビデオ調査とスタッフに対するヒアリング調査から GH の外部空間は、①玄関は道路から離れていて、道路との境界に緩衝的な空間を持つこと、②手すりや段差などに配慮し、痴呆性高齢者にとって障害となるものを排除すること、③居間などの人が集まる共用空間から直接出入りできる空間、④「東屋」のような屋根がある空間、⑤冬にも利用できる、外出ができない入居者でも利用できるサンルーム、温室などの半屋外空間、⑥花壇、畑などの植物や野菜を育てるための空間、⑦移動以外の他の活動も行なえるように余裕を持った路地空間、などが重要であると考えられる。また軽度の痴呆の場合安全な外部空間が自発的行動の場となることも明らかになった。

参考文献

- ユリエル・コーヘン、ジェラルド・D・ワイズマン:「老人性痴呆症のための環境デザイン-症状緩和と介護を助ける生活空間づくりの指針と手法」、彰国社 1995 年
- 浅野倫子ほか、共用空間の選択性と玄関の施錠が入居者の生活に及ぼす影響、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp1077-1078、2000

*1 北海道大学大学院工学研究科修士課程

*2 北海道情報大学情報メディア学部助教授・博(工)

*3 新潟県庁・修(工)

*4 北海道大学大学院工学研究科教授・工博

*5 北海道大学大学院工学研究科助手・博(工)

Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ.
Assoc. Prof., Faculty of Information Media, Hokkaido Information Univ., Dr. Eng.
Niigata Prefectural Government, M. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.
Inst., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.